

# 葛西善藏論

——「哀しき父」をめぐって——

佐々木雅発

## 一

旅なれや、旅なれや、五十年も旅、一日も旅、行き暮れて倒れ伏す処わが宿にて、くたびれたる身に美味もなし<sup>ナシ</sup>！

たしかに、葛西善藏の生涯は放浪の生涯であった。彼は若くして郷関を出で、異郷を流離い、そして行路に逝つたのである。

だがそれにしても、はたしてその旅居の日々、葛西の胸奥を埋めていたものはなんであったのか。ただただ前途への遙かな想いであったのか。それとも墳墓の地へのいやます想いであったのか。いま彼の処女作「哀しき父」を読み終えて、まず思い浮ぶことはこのことである。

明治四十二年五月六日、葛西は東京を立ち、茨城県大洗に赴き、その地の旅館小林楼に十月までの半歳を過した。彼の傍若無人の一生を顧ても、この大洗行ほど言語道断なものはいない。

大洗行の目的は、静かなこの海岸で最初の創作に没頭すること以外になかった。しかし半年の間、感興は一向に湧かず、葛西は

「僕は相不変、勉強の方は一向、駄目々々」(佐藤塗山宛書簡六月十二日)「僕はたゞ遊んで居る。酒を飲んで暮してゐる。何も書かない」(光用穆宛書簡九月一日)という懶惰な生活を送っていたのである。宿泊費は嵩むばかりで、旅館からは再三の追いつてを食う。むろん葛西に金を稼ぐ才覚のあるはずもなく、結局頼るものとしては、岳父平野弥亮からの送金であつたのである。

書簡集によれば、大洗滞在中に葛西は、都合十一通の手紙を平野に送っている。笑止にも、そのうち七通が無心状であり、残り四通がその礼状である。大洗へ旅立つ数日前にも、彼は岳父から金を送られている。それを懷にして、彼はこの地を訪れたのである。

文面は時候の挨拶に始まり、家内の息災を壽ぎ、丁重と慰慰を極めている。しかしその主意は露骨ほどはつきりしているのである。葛西はある時は「私事相不変無事達者にて読書と試作に力め居り候」(六月二六日)と書き(それは嘘である)、ある時は「確實なる根底の出来ぬ中に生活と悪闘してつい勉強を続ける余裕なきまゝ詮方なく初志に遠ざかり行く人の例は誠に乏しからず唯々

悲慘と申すの外なき次第に御座候」（九月二八日）と記し（これはまさに脅迫である）、「勉強」の究めがたさを嘆き（無知な岳父を幻惑すべく）、様々な理屈を並べ（みな出鱈目である）、今度こそ必ず大洗を引き上げると誓い（何遍も破った）、ついでに幾許かの金が欲しい（これだけが本音）と結ぶ。「誠に厚かましく存候へ共」「余り法外の様にも被存べく候へ共」「厚顔の段何とも謝辞なき次第に候へ共」、しかし金を呉れと哀願するのである。結婚以来妻は預けっぱなし、しかも年余にわたる生活費をせしめた末に、なおこの無心なのだ。これらの文面を読んで、おそらく人は、そのあまりにも厚顔無恥な態度に、激しい嫌悪すら覚えるであらう。

だが、なぜあえてこれほどの痴態を演じながら、葛西は日一日と帰京を延引していたのであるか。

全く此度は命がけで自分を主張し実行したのだ。僕にも生涯二度と斯んな事はあるまいと想はれる。これでも幸か不幸か亡ぼされるに至らなかつた。却而自分の運命を征服し得たやうな気がする。半ケ年の放浪は、自分の周囲——自分の運命との苦しい戦闘であつたのだ。（略）つくづく感ぜられる。文学の前には自分は勿論、自分に付随した何物をも犠牲にしたいと。（光用穆宛書簡十月二三日）

帰京の後、葛西は光用穆にこう書き送っている。彼にも三分の理はあつた。おそらく、「運命」とは自己の血肉に分け入りその人性を作りあげた「家」であり、「放浪」とはそうした自己の中なる「家」への反逆であつたのだ。

暗い吹雪の中を、汽車は青森を発つた。青森を出て、私は始めてはつとした気持になつた。如何に憫れな誇り、憫れな常識、憫れな貪婪、憫れな小ぜりあひに満ちた郷里ぞや！私はベツと唾でも吐きたい気持であつた。（急行券）

「憫れな誇り、憫れな常識、憫れな貪婪、憫れな小ぜりあひ」——己れに纏わりつく「家」の卑小な情実に対する、「ベツと唾でも吐きたい」ほどの憎惡の激情。まさしく大洗の極道とは、そうした激情を駆って、自己の中なる「家」を殲滅すべく、葛西が断行した壮絶な力技であつたといえよう。

しかし、なぜ葛西は、これほどの力技を断行しなければならなかつたのか。

自分の本当の我が儘を云へば、僕は少しも他人と共通な処がありたいと思つてもあらず、社会的に、一般的に標準せられて、彼は云はれるのを面白からず思つてゐる。（略）僕は自分独特なものでありたい。出来得べくんば歴史も、時代も超越した自分独自の統一あるライフを送りたいと望んでゐる。

（舟木重雄宛書簡四五年六月三日）

葛西にとって、自由と独立への渴望は深く激しい。父母から、妻子から、友人から、いかな社会や歴史からまったく離れ去つた自由孤高の生涯、大自在の天地に、囚われず累らわされぬ純一無純な自我を確立することこそ、葛西の熱い欲求であつたのだ。

世代を同じくする「白樺」派に通う、こうした純粹なる自我への一途な志向。だが葛西善藏ほど直線的に、この志向に突進したものは少い。現世に生きることが、不純なる自我を強いられるこ

とで、あるならば、現世に生きることを拒絶し、文学に生きること、いな滅びることこそ、自身の純粹なる自我を証しうる。いわば彼は、みづから十字架に上ったキリストであった。少々剽軽なキリストだが、しかし彼は、自身の純粹なる自我を証すべく、文学という十字架を負い、「人トナリ友親ヲ絶」し、赤貧と孤独に甘じ、陋巷に窮死したのであるといえよう。

## 二

だがそれにしても、「運命」との「戦闘」をいふ、「運命」の「克服」をいふとしても、実は、「戦闘」なり「克服」なりの内容そのものが問われなければならない。(なぜなら、それこそが葛西の場合、自我の純粹を証すべき文学の内容たりうるからである。)しかしこう問うとき、はたしてここに、字義通りに「戦闘」といい「克服」といいうるものがあつたらうか。一切の恩愛を遮断すべき「戦闘」や「克服」が、まさにその恩愛の庇護に縋ることを通して遂行されているのだ。友人にむかつて「運命」との「戦闘」や「運命」の「克服」を高らかに宣言するその陰で、密かに岳父を欺き送金を乞う葛西の姿は、悲痛であると同時に滑稽である。葛西の、自我の純粹を証すべき行為は、あきらかにその権威を失墜していると言わなければならない。

榎本隆司氏も指摘するように、酒と女に耽溺しながら、平野への飽くなき無心を続ける葛西にも、さすがに「来るべき反動が、恐ろしい」(光用穆宛書簡九月一日)という危惧はあった。現世の生に背くことの苛責である。しかし彼は、かくしてこそ「僕は人

間になるのだ」(同上)と、むしろその苛責を自己の「唯一の強い味方」(同上)として、新生への発条たらしめていたのである。たとえば「悪魔」の中で、葛西は次のように書いている。

俺達は自分自身を食ひ尽して、初めて真剣に他に鋒を向ける権利と強味が出来るのだ。滅びよ！ 新しく生きんだ。俺達は決して生活なんと云ふことを苦にしていけない。俺達がいよいよ食へなくなる、と、そこにより以上の生活の道がちやアんと開かれて待つて居るんだ。それが事実と云ふものだ、わかり切つた事なのだ。俺達はどん底に落込んで初めて最貴最高の生命を呼吸することが出来るのだ、それは決して空想と云ふものではない。真理だ。

葛西は続けて、「俺達は一切を否定し一切を破壊してこそ初めて真の絶対境に到達することが出来るのだ。そしてそこには夜と云ふものがない、太陽が雲母の如く降り濺いで居る、無辺無際涯の広い／＼河原なんだ。唯無量無数の焼爛れた石塊ばかりなんだ。そして選ばれたる俺達は、賽の河原の子供の如く、指を爛らし爪を剝がして、ただ／＼再生の一念にその石塊を積み重ね不断的精進を続けなければならないのだ」とも書いている。

葛西は、ひたすら滅びることによつて、「真の絶対境」に住まうことの栄光を念じていた。そのとき、現世におけるあらゆる苛責や恥辱は、かえって栄光の座に到るための必須の「精進」であると言うのである。

まったく仕末におえない身勝手な論理といえよう。しかも、事実葛西の一生は、こうした身勝手な論理を貫いたように見える。

だが、葛西の決行する「精進」の内実を見るものにとって、この論理はなんとしても滑稽なのだ。そして問題は、はたして葛西が、その己れの滑稽さに少しも気づいていなかったのか、ということなのである。

### 三

もちろん岳父平野弥亮に、このような論理の通ずるはずはない。にもかゝらず平野が、送金を絶たなかったのはなぜか。むしろただただ欺かれていたというのではあるまい。またただただやぐざな男に嫁した娘不憫さに駆られていたのでもないだろう。おそらくその胸には、「東京に出て勉強してゐる人」に対する、東北農民の複雑な心情が疊まれていたはずである。富と文化の集中する都会を、遠隔の地にありたゞ仰望するしかなかった平野弥亮。

あるいは彼にとって、このやぐざな婿は、にもかゝらず、都会の真中に潜み、時あらばその富と文化の一端を掠取すべく、自らが密かに送り込んだかけがえのない使者ではなかったか。少くとも彼の、これまた飽くことのない送金には、飽くまでも見返りを期待する狡猾で貪欲な東北農民の、物欲的な臭気が漂っていると考え感ぜられるのである。

しかも、葛西の書簡の文字が、まさしくその一点に狙いを定めているとき、ことは見逃せないのである。「勉強さいすれば幾分か金は得らるべし」(九月十四日)。「先月二三の原稿を金にして貰ふため東京へ郵送致し置き候」(同上)。——当時の葛西に、原稿で金を取るなどという芸当が、およそ不可能であったことは

断るまでもない。とすればなぜ、葛西は時にこのような言葉を点綴したのか。あきらかに、彼は岳父の期待に籠められたものゝ性格を知っていたのだ。だからこそ彼は、岳父の期待を繋ぐべく(あるいは賺すべく)、あらぬ便辭を弄したのである。

だがこれは、あまりにあざとい所業といえよう。このとき葛西の精神は、弁解の余地のないほどに卑劣であったといわなければならない。岳父を瞞着せんとする精神の位相において。いなこの場合、至上——神たるべき文学を、担保に利用せんとする精神の位相においてである。

だがしかし、あるいはこうした極め付け方は無意味かもしれないのだ。なぜなら、文学は彼にとって、もともと至上でも神でもなかったかもしれないからである。

たとえば葛西が、「俺は忍路高島を唄はう。忍路高島は俺の少年の夢だ。俺は少年の夢を抱いて忍路高島を放浪したのだ。俺の胸は火であつた。けれども俺は凍え死なうとした」(「悪魔」と書くときに、はたしてこの「少年の夢」とはどのような性格のものであつたのか。

少年の日、葛西の一家は、あたかもカナンの曠野をさまようユダヤの民のごとく、青森から北海道へ、そして再び青森へと、永住の地を尋ねてさすらっていた。襲い来る貧困と屈辱に抗し、一条の光を求めて、彼等は津軽海峡を往復したのだ。その敗亡の一族が、心の底で密かに培っていたものはなにか。

「酔狸州七席七題」の中で、葛西は、「私は十四五の時分に、青森市へ丁稚小僧に行つたことがありまして、半年余り奉公しま

したが、その時分は、没落した一家の再興といふ考への外に、少年の心持としてはありませんでした」と語っている。一家の悲運を目の当り見つめながら、成長を遂げてゆく少年の、複雑な心の陰影に注意しなければならぬ。すでに成年に達した葛西が、ともすると見せた硝子のごとく脆く、またその破片のように鋭い心の陰影——相手のうちに湧く己れへのほんの微かな軽侮の気配をも、見のがすことのできない心の陰影。それは豊かに育つことのできた人間のものとはいえないのである。

そしてそれゆえに、葛西はひたすらに、「没落した一家の再興」を祈り続けなければならなかった。現在の貧困と屈辱を拭う未来の栄光を、彼は願ひ続けずにはいない。しかもそうした零落の一家の、あくまで現世的な欲望を、その一家の嫡男として、葛西は生涯引き摺って生きなければならなかったのである。

なるほどそこに錯綜する恩愛の絆こそは、葛西が飽くまで断ち切らんとしたものであったろう。しかし己れに懸けられる熱い期待を前にし、またその期待に応えなければならぬ己れの重い使命を前にして、葛西は所詮無力でしかなかったのではないか。

「つまり、自分は日本的な伝統主義者であり、家族主義者であり、その亡霊が自分を脅してゐたのだ。その亡霊の苛責の前には、自分は実に無抵抗な弱者である」(「弱者」)しかなかったのである。

恩愛からの孤絶に象徴される生活の全敗を、自身の純粹なる自我の証しとして、むしろその全敗をこそ企図せんとする倒錯した論理の底に、しかし葛西は、いかにかして生活に勝利し一族を救拔せんとする深く遙かな心情を隠していた。いわばそれは胸に一

物ある岳父の期待にも微妙に呼応して顫動する、葛西の奥処の血の性であったといえよう。

葛西にとって、文学とは所詮この勝利と救拔を実現すべき契機でしかなかったと言ひ切れば嘘になる。しかし彼の文学を生むべき目を覆う狂態は、おそらくこのことゆえに、恩愛から無限に許容され、またこのことゆえに彼も、その無限の許容に甘えることができたのではなかったか。

#### 四

年譜を迎れば、葛西善蔵は、明治四十三年六月九日鎌倉円覚寺松嶺院に入り、七月十九日同山釜谷米店前に移っている。九月中旬帰京。そして十一月中旬、岳父に伴われて上京した妻つと長男亮三を迎え、東大久保に居を構えて親子水入らずの生活を始めたのである。しかし経済的な逼迫はたちまち募り、翌年の八月三日、一家は再び離散のやまなきに至った。「奇蹟」発刊の相談が持ち上ったのはその翌年、明治四十五年一月のことである。

はたして、止めどない転落の歲月であつた。貧窮と無為の惨憺たる生活の連続。たしかに葛西から言わせれば、それは恩愛に象徴される世俗の羈絆から脱れるための、意志的な苦行であつた。世俗を斥け世俗を超えるものとしてある自己の「個」の真実、純一無雑な「個」の「絶対境」を現出するための(むしろそれは、その表現において完成されるはずの)、不退転の苦行であつたのだ。

だが一方、書簡集を読んでゆくかぎり、葛西から、かえって驕

慢な面貌は消えてゆくのである。かつて、「僕は此頃でも少しも淋しいと思はない。僕はやはりひとりで居られる男だ。この分では親戚の者悉くが死絶えても孤独を感じまいと思ふ。僕は僕自身を愛し、且つ虐待してゐられる限り人生は僕にはそんなに淋しい処ではない」(光用穆宛書簡四三年五月十七日)と豪語した葛西であった。しかし、鎌倉の半僧生活、妻子の上京と帰郷を境にして、葛西には次第に沈静な時間が訪れるのである。

葛西は、「結局大勢の前には屈従の外ない。憫れなる反抗や強がりを言ふことを止めて、流れるままに任して静かに自然の推移を観照したい」(同上八月二七日)と言ひ、「實際僕の心は今の処甚しく餓えてない。冷たい刺激よりも寧ろ温い刺激に神経がふるへる。涙を誘はれることになる。強い刺激は今の処僕には用はない。子供を伴れて夕方散歩する時の淡い孤独感や、思索なき細君が不図した場合に自分の死期を口にしたります、——其種の事を感味する丈に満足してゐる」(同上十二月十日)と語る。さらにそれは、「僕も確かに或物を求めてゐるのだらう。けれどもその或物が、自分が斯うして自分の附屬物一切を犠牲にしてかかるほど価値があるものだらうかと思ふと孤独だとか何んとか言つて居られない暗い心持になる」(同上四四年七月十三日)という、痛切な自覚に連なつてゆくのである。

僕は寧ろ平凡な日常生活に細かい觀察を向けたいと思つて居る。発作的な感激や、理屈の遊戲を離れて、平凡非凡美醜そのまゝの具体的表現を望んでゐる。その日その日の虫けら同様といふやうな平凡な人間のライフにも立ち入つて見れ

ば、実に驚異に堪へない複雑な生苦の糸がクモの巢の様に張られてゐて、アートの熟練のない僕等を絶望させる。(光用穆宛書簡四三年八月二七日)

平凡な日常の些事を愛惜し、生活の謙虚な觀察者たらんとする葛西。少くともこの時の彼のこのような文面からは、世俗を突き抜けてある「個」の体現者たらんとする浮き上つた自負心は見られない。いわば彼は、すでにそのような自負心の空しさに気づき始めていた。純粹なる自我などというものはたしてあるのか。自我とはつねに外界の具体性に繋がれてのみあるのではないか。「平凡非凡美醜そのまゝの具体的表現を望んでゐる」とはおそらく、そうした自我への覚醒であり、またそのような自我への凝視を意味する言葉であつたといえよう。

むろん葛西の心の歩みに、なお大きな振幅のあることは否めない。「作」の出来ない焦躁と苦悩に、時に震撼として、自己を鞭打ち、一切を否定して、たゞひたぶるに自己の絶対化に向わんとする叫びを、以後の葛西からも聞くことができる。しかしにもかからず、彼は「思ひ切つた破壊の態度に出るほどの元氣も尽きた」(同上四四年八月三一日)といわざるをえないのである。

そして、重要なことは、こうしたいわば青春の狂熱の沈潜してゆく時期、「哀しき父」という処女作品が誕生してゆくことなのである。

大洗行から教えても、すでに三年の歳月が閲されている。反抗と破壊による純粹なる自我の発掘は、しかし、たゞ徒な反古の山と救いようのない生活の危機を残したにすぎなかつた。いになに

よりも、過ぐる三年の狂態への懷疑を残したにすぎなかったのである。「奇蹟」発刊の時期は刻々に迫っている。思えば長い助走であった。しかもなんらの加速もないままに、たゞ息切れて、いまや葛西は跳躍しなければならなかったのである。いわば窮余の作品であった「哀しき父」。しかしそこには、一体どのような主題が秘められていたのであるか。

## 五

「哀しき父」は、二十枚足らずの小篇である。いま後の論述のためにも、一応の梗概を記しておくことにする。

——昨年の夏前まで、彼は妻と子の三人で、郊外の小さな家に、貧しいながら静かな暮しを送っていた。彼にとつて、「子供は唯一の友であり兄弟であつた」。彼は子供と絵を描いたり鬼ごっこをしたり、縁日で買った粗末な胡弓を弾いたりして遊んだ。棄てられた小犬と数匹の金魚と亀の子が仲間であつた。

しかし、次第に彼等の生活は窮迫してきた。従順な妻の溜息も深くなってゆく。一日、彼の心ない酒飲みの友人のために、亀はどこかへいなくなってしまう。そして、それを追うかのように、間もなく彼等の哀しい離散の日がやって来たのだ。

いま、彼の子は遠い彼の郷里で、彼の年とつた母に護られて成長している。彼が、苦しい中から工面して送った毛糸の足袋や玩具や絵本を、「これもお父さんから、これもお父さんから」と言つて、近所の人達に並べて見せるまでに成長しているという。だが、その子供の健やかな成長の知らせは、外界のすべてから自己

を封鎖し、ひたすら自己の世界に向向する「冷たい暗い詩人」の彼に、深い喜びとともに、酷しい痛みをもたらさずにはいない。彼はいままでも、さらにこれからも、子供の無邪気な信頼を裏切り続ける、無力な哀しき父でしかなかった——。

ところで——、もし私小説に描かれているものが、作家その人の、苛酷な人性の危機体験であり、そこに寓されているものが、人性の危機を恐れず、いな進んで人性の危機を招き、かくして危機の体現者たることにおいて、人生の選良たらんという自恃の姿勢であるとすれば、「哀しき父」一篇からは、たしかにそうした私小説の表徴を捉え出すことが可能である。（というより、かえって葛西のこうした作品を典拠として、そのような私小説の表徴は説きおこされたのだといえよう）。外界のすべてから自己を封鎖し、ひたすら自己の世界に向向する「冷たい暗い詩人」の「彼」。子への煩惱に悩みながら、なお「偉大なる子は、決して直接の父を要しないであらう」と突き放し、「どこまでも自分の道を求めて、追うて、やがて斃るゝべきである」と決意する「彼」。さらに啞血にも屈せず、「これでライフの洗礼も済んだ」として、なお「静かに詩作を続けよう」とする「彼」。なるほどここには、肉親への愛憐に責められつゝ、しかもその絆を、厳しく断ち切つてゆく葛西善藏の、苛烈にして非凡な芸術家としての面目が、はつきりと描き出されていると言えるのである。

だがしかし、この作品の主題は、はたしてかゝる性格のものとして単一化できるのか。あるいはこの作品の主題には、まさにそれとは裏腹の性格のものが、含まれてはいないのか。肉親への愛

憐に責められつゝ、しかもその絆を、厳しく断ち切つてゆく裏手とした芸術家の姿という先の言い方に振れば、むしろ逆に、肉親の絆を厳しく断ち切りつゝ、しかもそれへの愛憐に、是非なく牽かれてゆく葛西善蔵の、「哀しき父V——哀しき人の子の親としての姿そのものが、それこそ否応なく、ここには描き出されているといえないか。」

彼は気の進まない自分を強ひて、午後の散歩を続けてゐる。そしていつか、彼は、彼の散歩する範囲内では、どここのランブ屋では金魚を置いてる、置いてないかが大概わかるやうになつてゐた。彼は都会から、生活から、朋友からあらゆる色彩、あらゆる音楽、その種のすべてから執拗に自己を封じて、ちつと自分の小さな世界に黙想してゐるやうな冷たい詩人なのであつた。それが、金魚を見ることは、彼の小さな世界への焼鑊をさし入れるものであらねばならない。彼は金魚を見ることを恐れた。そして彼はなるべく金魚の見えない通りをくぐと避けて歩くのであつたが、うつかりして、立止まつて、ガラスの箱なんかになくぐと泳いでゐるのに見入つてゐることがあつた。そして気がついて日のカン／＼照つた往来を涙を吞んで歩いてゐるのであつた。

多くの人が、葛西文学の「サワリ」として、推奨する箇所の引用である。が、まさしくこの「サワリ」において、葛西が描き出しているものは、一切から隔絶した「小さな世界」に沈潜する「彼」の、孤高の姿ではなかった。むしろ、その「小さな世界」が攪拌されたときの、「焼鑊をさし入れ」られたような痛みでこ

そあつたのだ。子供との楽しかりし日々を忘れんとして、金魚の見える通りを避けて歩きつゝも、いつしか鉢の中に涼しげに泳ぐ金魚の赤い流れを追つてゐる己れに気づき、涙を吞んで陽ざかりの往来を立ち去る父親の哀切な後姿。さらに「お父さんはいやだ、何も送つてくれないからいやだ」という子供の頭はない非難に心震わせ、「真実なる子供の友となり、兄弟となり、教育者となり」と祈る父親の哀切な横顔。つまり切り離すべくもない血の縁で結ばれた子への煩惱に呻く人の子の親の姿こそ、「哀しき父」一篇が否応なく描き出したものであつたのである。

それにしても、自らを現世への叛逆児たる文学の使徒として誇らかに烙印した葛西であつてみれば、ここに表現されるべき自我は、終始、十字架を負う者としての高い矜持に貫かれてゐるはずのものではなかったか。あの大洗から鎌倉へと続く反抗と破壊がもくろんでいたものは、恩愛に象徴される世俗への愛執を絶つこと——つまり自らの内なるすべての地上的なるものを排斥し天上へ連なる自我を獲得することであり、さらにその表現でこそあつたはずである。しかし少くともここに表現されているものは、はなしくも、「哀しき父V」という役割を荷つた自我であり、「良き父V」たりえぬ怨みと羞じらいによつて塗り込められたあまりにも地上的なる自我であつたといえよう。

もちろん、だからこそそのような自我を背景として、それら一切を黙殺し、詩作へ専心する「彼」の形象に、十字架を負う芸術家としての峻酷な精進が、封じ込められてゐると見る論点を否定するつもりはない。しかしその意味で、「哀しき父V」という映像



が、芸術家としての峻酷な精進の比喩であることを一応は認めても、なお人哀しき父Vという映像の現実における重さそのものが、比喩としての枠を越えて、その具体性において生々しく浮び出てくる逆説を見のがすわけにはいかないのである。

## 六

たしかに、人哀しき父Vの映像は、時に芸術家の峻酷な精進に対応されているというよりも、むしろ人の子の親の複雑な心情に対応しているといえるのである。たとえば「哀しき父」一篇の画面点晴ともいふべき「夢」の場面で、葛西は一体なにを表現しようとしているのか。

……彼の子供は裸体になつてゐた。ムク／＼と堅く肥え太つて、腹部が健康さうにゆるやかな線に波打つてゐる。そして彼にはいつか二三人の弟妹が出来てゐるのであつた。室は広くあけ放してあつて、青々とした畳は涼しさうに見える。そこには子供供の祖父も、祖母も弟妹もゐるのだが、みんなはゴロ／＼寝ころんでゐる。唯彼ひとり、ムク／＼と堅く肥え太つて、ゆるやかに張つたお腹を突き出して、非常に威張つた姿勢をして、手を振つて大股に室の中を歩いてゐるのであつた。

ふと、ペラ／＼な黒紋附を着た若い男がはひつて来て、坐つて何か云つてゐるやうであつた。すると子供は歩くのを止めて、ちよつと突立つて、

「さうか。それではお前はおれの抱へ医者になるか——」

斯う、万事を呑込んでゐるやうな鷹揚な態度で云ふのであつた。それを傍から見てゐた父は、わが子その態度やものの云ひぶりに、覚えす微笑させられたのである……。

陰湿な下宿の一室で病苦と死の不安を、「飲みつけない強い酒」で紛らせる夜の眠り。その重苦しい眠りの中で「彼」は夢を見る。なるほどその夢は、「辛うじて医業によつて支へられてゐた彼の父の三十幾年と云ふ短い生涯」を考え、さらに「彼自身の健康状態」を思うとき、「子供供の未来に暗い運命の陰影」を落して悩ましい。だが同時に、その夢に「彼」は、「非常に大きなニューモア」を感じ、また「子供と云ふものの如何にさかんなる矜りに生きて居るか」と云ふことを知つて、心とむのである。

たとえ一家全体が「ゴロ／＼寝ころんでゐる」としても、ひとり「子」だけは精気に充ちてゐるのである。「室は広く」、「青々とした畳は涼しさうに見える」。しかも「抱へ医者」さえ出入りしてゐるのだ。夢で、子はあくまでも隆盛と繁栄の直中に生きてゐる。そしてそのことに、「彼」は「覚えす微笑させられ」るのである。

夢が秘めた願望の表れであるとすれば、葛西はこの夢を描くことによつて、まさしく「彼」の秘めた願望を明かしてゐる。あるいはそれは、子の「威張つた姿勢」や「鷹揚な態度」に、己れの憂憤を晴らさんとする人の子の親のいじらしい願いであり、あるいはまた、子があくまでも隆盛と繁栄に生きんかしと念ずる人の子の親のあつち願ひであるといえよう。自らの業ゆえに、「彼」はすでに孤独と貧窮に斃れるしかない。そのことに悔いはないと

しても、なお夢で「彼」は、子が決して己れの生き様を繰り返さぬことを、子が必ずや己れの屈辱を雪いであまりある「さかんな狩り」に生きんことを、祈るのである。

はたしてこの夢が、陰湿な下宿の一室で、葛西が実際に見た夢であつたかどうか、知る由もないことである。しかしおそらくこの場面を書く葛西の心は、激しく揺れていたにちがいない。断るまでもなくここには、葛西を貫いて脈動するあの「没落した一家の再興」という悲願が、にもかかわらずその悲願に耐ええぬ葛西の拙い宿運が黒々と影を落しているのである。

## 七

霧のやうな小雨が都会をかなしく降りこめて居る。(略)

彼の胸にも霧のやうな冷たい悲哀が満ち溢れてゐる。執着と云ふことの際限もないと云ふこと、世の中にはいかに気に入らぬことの多いかと云ふこと、暗い宿命の影のやうに何処まで避けてもつき纏うて来る生活と云ふこと、また大きな細菌のやうに彼の心に喰ひ入らうとし、もう喰ひ入つてゐる子供と云ふこと、さう云ふことどもが、流れる霧のやうに、冷たい悲哀を彼の疲れた胸に吹きこむのであつた。

ところで宇野浩二はこの一節を引用しつつ、「これが、もし、葛西の、小説作法のための文句でなく、触りでもなく、本音である」とすれば、葛西は、二十五歳の年に、自分の子を『大きな細菌』と看做し、その細菌が自分の心に喰ひ入つてゐると考へ、飽くまでも自分の道（文学の道）を究めるまで追求しようと決心してゐるやうに思はれる。が、私には唯『やうに』思はれるのである」と書き、さらに、「事実、結局、葛西は、重い病氣と厳しい貧乏に堪へ忍んで、どこまでも文学の道を追求して死んだ形になつた。しかし又、葛西は、死ぬまで、創作の辛さと病氣の苦しさに苛まれたやうである」と記している。

たしかに宇野は、葛西の外に示した「形」と、内に隠しつづけた真実との差異を洞察しているといえるのである。

たとえば、「哀しき父」の情調を深めている鮮やかな外界の点描「彼」を取り巻く下宿の人々の生體——は、なにを意味しているのか。

「暗い室にとじこもつて」終日を送る「北国」から出てきたばかりの「予備士官」。予備士官を訪れる「近所の安淫売」。そしてその予備士官の悪疾による呆気ない死。あるいは「力無く見ひらいた眼の美しい、透き通るやうな青い顔」をした細君と、彼女をなにかと勞りつゝ、朝早く勤めに出ては夜晩く帰ってくる夫。「細君の軽い咳音もまじつて、コソ／＼と一晚中語りあかしてゐるやうなこともあ」るその夫婦の淋しい生活。たしかに、「簡潔な筆の運びの中に、裏町に逼塞して生きる庶民の生體をみごとに集約した」<sup>註5</sup>表出であるといえよう。

おそらく彼等とはいうより彼等もまた、農村の貧困に追われ、富と文化を求めて都会に上つて来た人々なのだ。しかも「またいつとなくだん／＼場末に追ひ込まれてゐた」人々なのである。幻想を抱き、都会を流離う人々の群。ここには、いわば明治から大正へかけての、「庶民」の存在様式の哀しい原像が、閃光に照らさ

れたように、けざやかに写されているのである。

だがそれは、単に「彼」を取り巻く外界の、鋭い描出にのみ終っているのではない。「彼」の眼に次々と映り、「彼」の心に次々と結ばれる、そうした「庶民」の哀しい原像は、外にあるものでありながら、またきわめて本質的なものとなっているのだ。それは、つねに「彼」の哀しみを捲き込み、あるいは、「彼」の哀しみに溶け込んで、まさしくそこに生きる「彼」自身の、内面そのものの描出となっていることを、見のがすことはできないのである。——「彼」もまた、所詮そうした哀しい原像を抱えた、一人の「庶民」であつたのだ……。

だが、とすればここに書き込まれているものは、やはり葛西の、あの無惨な宿運でこそあつたろう。「没落した一家の再興」という悲願に心昂らせながらも、無能無才にして苛酷な生計を強いられ、それゆえに病苦を負つて生きなければならぬ（宇野浩二の言うように、ただただ「創作の辛さと病気の苦しさに苛まれ」て生きなければならぬ）彼の、内に隠しつづけた真実でこそあつたといえよう。

人性の危機の体現者たることにおいて、人生の選良たらんとする葛西の、主観的な意識を無視するつもりはない。しかしそうした意識を踏まえた上で、彼をも含めた客観的な世界の描出が、かえって彼の意図を喰ひ破り、意識の下にある彼の、黒光りする生の脈脈を堀り起している逆説に、さらにまたそのことによつて、葛西が一層深く、己れの拙い宿運を知らねばならない逆説に、触れたいばかりなのである。

おそらく葛西の、こうしたきわどい自己の表現の手順は、あの平凡な日常の些事を愛惜し、生活の謙虚な観察者たらんとした妄心のうちに準備され、「その日その日の虫けら同様といふやうな平凡な人間のライフにも立ち入つて見れば、実に驚異に堪へない複雑な生苦の糸がクモの巣の様に張られてゐる」という認識によつて、熟成されたものであるにちがいない。いわば葛西は、外界の「庶民」の上に自己を重ね、自己の生を「平凡な人間のライフ」に重ねながら、（天才たることを任じた葛西にとつて、それはまさに幻滅と喪神を意味するものでしかなかったらうが、しかしその幻滅と喪神のうちに）自身の生を見つめ、描き出していたのであるといえよう。

さて、正宗白鳥は、「仲間」を読んで、「虐げられたる人の一生といった感じが、読後に油然として起つて来る。『虐げられた』と云つても、それは、天才が衆愚に認められなくて侮辱されてゐるといふ意味ではなくつて、才能の乏しい人間が藻掻いてゐる苦しさ<sup>註</sup>が、傍人に侮蔑の目で見られることを私は意味してゐる」と書いている。実に、白鳥一流の冷評であるといえよう。しかし、これはまた葛西にとつて、知己の言でもあるといえないか。

たしかに、葛西が描いた哀しい自画像は、己れが天才たることを証するためのものでもなく、人生の選良たらんがために企まれたものでもない。よしそういう意図をひそかに抱き続けつゝも、終に彼の胸奥を埋めたものは、己れが他を絶する特異な個性ではさらになく、たゞに世の常の人間——凡胎の子たることの、痛切

な自覚であつたにちがいない。しかし葛西の文学は、少くとも「哀しき父」に始まり、「子をつれて」を貫通し、「父の葬式」等へ結ばれる私小説の本流は、この痛切な自覚の上にこそ、はじめて生誕したものではあるまいか。

——そして、それこそが（自己の無惨な宿運を刻むことが）、彼にとって、彼が生涯裏切りつづけた恩愛への、まさに唯一の、良心の証しであつたといえよう。

註1 明治三十八年八月当時の日記の一節として、谷崎精二『放浪

の作家』に引用されている。

2 『哀しき父』論（『学術研究』第十六号昭和四年十二月）。なお小論は、この論考から多大の教示を受けている。

3 宇野浩二「葛西善蔵の一生」（『独断的作家論』所収）に、結婚のとき仲人が平野に伝えた言葉として紹介されている。

4 宇野浩二「葛西善蔵の一生」。

5 榎本隆司「『哀しき父』論」。

6 「志賀直哉と葛西善蔵」（『作家論（二）』所収）。

## 新刊紹介

瓜生敏一著

### 『妙好俳人 緑平さん』

瓜生敏一氏の令名は、すでに氏の先駆的な「河東碧梧桐」論（『俳句講座』8巻、昭33、明治書院刊）や、今や自由律俳句研究上の基本文献たる総覧としての「明治・大正の新傾向及び自由律俳句誌」、及び「昭和期の自由律俳句誌」（『新俳句講座』1・2巻、昭38、新俳句社刊）、そして現在連載中の「若い日の一碧楼」（『青い地球』27

号・昭41・6）、『青い地球社』などと、共にある。

『妙好俳人 緑平さん』は、「層雲」の人々以外には余り知られることのない、自由律一途の俳句作者で、貧しい北九州の一炭坑医として過し、晩年に郷里柳川へ帰った木村緑平の句と生涯を、周辺や時代にも照明を当てながら、丹念に発掘したものである。今日、山頭火の遺業は世に出たが、山頭火と並べてもよい緑平の句と生涯は、いまだ知られるに至っていない。瓜生氏は、山頭火の真実の友、庇護者であつた緑平の面をも含め、緑平の類い稀な句の世界

を示されている。うまい句よりも「よい句を作りたい」と念ずる緑平の句には、「雀 生れてゐる 花の下をはく」など、三千に及ぶ雀の句や、「病の妻の掌に何ンと美しき桃かな」など多くの、病妻を看とつた句に、あくまでつつましく、誠実で、融通無礙な独自の境地が展開されている。瓜生氏の曇りない眼、柔軟ながら正確で抑制の利いた筆致が、この俳人に誠にふさわしい。

（昭和48・9刊、春陽堂書店、B6・三〇二ページ、図・肖像・木村緑平年譜、九八〇円）

〔竹田日出夫〕